

VOICE

Weekly
Interview
No.410
Text & Photo
Mondo

Photo: Takashi Kawashima

「私は自分のことをフィジカルな演奏家だと思っています」

むかいやま・ともこ

ピアニスト/美術家 向井山朋子さん

新宮出身、オランダ・アムステルダム在住



10月24日、朋子さんのピアノ演奏を聴いた。彼女がよく弾く現代音楽で、同一モチーフが無限に展開していく曲であった。紡ぎ出される音は大浜に打ち寄せる波のよう。似てはいるが一つとして同じ波長はなし。50分近く吸い込まれるようにして、彼女の10本の指が88の鍵を媒介して表現するフィジカルなパフォーマンスを堪能させていただいた。

「私はピアノの前で育って、自分を失ったときも、音大でアイデンティティーが崩れたときも、いつもそこだった。原因の多くの解決も、大抵はそこにあった。いつもピアノの前で「自分でできること、できないこと」について考えてきました」と語る真摯なピアニストである。

子供時代から、お話を。

一王子小学校に入る前、5歳からピアノを習っていました。でも、なんだか嫌だった。

大好きだったのは、小学校入学と同時に畑先生に付いて始めた絵です。何を書いてもよく、その自由度が気に入っていたのかな(一応「夢」なんて漠然としたテーマはありました)。

なにしろ「外から型に入れられる」のが大嫌い。団体行動なんてのは、一番の苦手でした。

城南中学校でも絵はやって、学園祭のバザーには売り物として大浜の石に猫を描いたりしていました。あと体を使うことも好きだったので、体操クラブに入り平均台や組み体操などをね。この頃はまた、ファッションも大好きになった。ダイロン(染料)を使って自分で若草色に染めた布でサロベツなんかを作っていました。

そして、音楽の道へ。

一新宮高校3年の時は、①絵の道に行くか②ピアノの方に進むか考えました。①で今ピアノをやめると、それで絶対おしまいになる。ところが②なら、後からでも絵の道に戻ることができる。で、武蔵野音楽大学に入り、大学院までピアノをね。最初は面白くなかったが、最後の3年くらいになって自分の進む方向が見えてきて熱情が湧いてきました。ジョン・ケージやビートル・ブレーズなど、生きている作曲家の作品をやりだしたから。

このあと、新宮ロータリークラブ奨学金でインディアナ大学音楽科(2年)とオランダ政府奨学金でアムステルダムにあるスウェーリンク音楽院(2年)で学びました。

国際ガウデアムス演奏家コンクールで優勝。以来、ピアニスト+美術家としての活躍が。

一オランダのコンクールに入賞したことで、映画監督、デザイナー、建築家、写真家たちが私に門戸を開けてくれ、コラボレーションが可能に。美術家としても活動している現在につながっているのです。

